

神 話 と 文 学

宗 美 智 子

序

この論を始めるにあたって、私自身が以前勉強して来た学問と、現在に至る過程をお話申し上げることが、若干でも導入として役立てばと、ここに記させていただきたい。

学部で学んだ文化人類学、或いは社会人類学、民族学というものは今世紀になって急成長を遂げた学問で、そのかなりの貢献を、20世紀前半は、英米の優秀な、偉大な民族学者の努力に、そして後半に於いては、私の Claude Levi-Strauss の思想的発展に大いに負っていることは言うまでもない。私自身をこの学問に結びつけたものは、偶然であり、ただ単に美学的なるもの——バランスの問題と、“神話”という言葉が、臍げに、自分の興味をひくと言うよりむしろ、浮かび上がっていただけで、社会学を始めた時に、その先に神話論が展開されているなどということは想像だにしていなかった。まして、洗練されて、優美な姿で出会えるなどとは思ってもいなかったので大変な驚きであった。

では、何故、そうまでして出会えた学問の道を進もうとしなかったかの理由になるが、それは、日本の文化人類学という学問の目差す道及び方向性が、私が臍げに目差していた方向と、もしかしたら、少し違うのかも知れないという不安とともに、皆が批判できる大いなる先達を私は批判できないし、まだ理解していないと思ったので止まるしか術はなかった。また、学問の現状としてはやはり民俗学——folkloreの方向へなだれ込み、marginal な部分の研究が多くなされたが、この領域は、理論的な再構築の難しい部分でもある。文化人類学全体としては、山口昌男氏のような大変優秀な学者が、Post-Levi-Strauss として、アフリカ研究で大きな成果を挙げていられるが、最終的に帰されるところの “sup-

er naturalな力”の問題は、大変大きい命題で、大変微妙な部分なので、そこでも進めなかったのも事実である。私に残された道は、遺伝子工学の分野で人類へのメッセージがなければ探る道しかないかと、真剣に思ったのも本当である。

今、再び大学で勉強させていただいて、何故英文学を選ばせていただいたかの理由は、私にとっては理由があると言える。

第一に、正統派の学問の方法を勉強しなかったから。第二に、力及ばずとは言え、民俗学を勉強した者としては、異文学である英文学の文野は、多少なりとも客観視できるのではないかと思ったこと。最後に、最も大きな理由として、自分にとって未知の英文学のfieldは文学人類学の受け入れられたfield ほどは、——誤解を招かないように使うべき言葉であるが——“汚染”されていないと信じていたからであった。がしかし、三番目の点は、私が全く無知であったことが自覚されたとおり、最も見込み違いの点で、文学のfieldこそ、古今にわたり、最も現時の思想、政治、イデオロギー等に係りつつ、かつ最も美しいものを生み出す分野であることを失念していたようであった。それは言葉の学問であることの宿命かも知れないが。ただ、私のささやかな希望をつなぐ文学のfield への旅は、それでも目差しているところは変わらないようなので、やはり確認の旅と思われる。共に言葉の文化へのアプローチとして、文学の方法と、どこかで邂逅することができたらと切に望んでやみません。

1. 言語学と人類学

Raymond de Saussure による言語学の概念において、言葉は、記号であり、その意味との関係は、意味するもの—signifiantの体系が、意味されるもの—signifié（意味内容）の体系と表裏一体の結びつきによって分節化され、signe —記号を形造るというものであった。後の言語学の発展により、この表裏一体という関係は改められ、対応関係に入るだけで十分とされているはずである。

人類学と言語学の出会う点があるとしたら、それは、人間の科学にとっての基本的事実、すなわち、言語行為に関する法則は、無意識レベルにおいて、話す主体の意図の外で働いているという点であり、そうであれば逆に、他の社会的事象を形象化する客観的な現象として、言語法則を考察することができるという事実の指摘がなされた点である。それは既に、Levi-Straussの先達である民族学者によって指摘されて来ていた。^(脚注1) Levi-Straussにおいては、論理的構造体の産出にあたって精神の無意識的活動が重要な役割を演じているという点と、全体を構成する要素は、それに内在する意味を持っているのではなく、その意味は、全体の中で位置からうまれるものであるという基本原理に基づくという点に、言語学との接点が要約されるであろう。

そもそも、N. Troubetzkoy 及び R. Jakobson に代表される構造主義言語学は、社会科学事象を扱う点で、Levi-Straussに大いなる自信を与えたとは言えようが、その流れは、純粹言語学の流れであり、文学批評的には、一つはロシアフォルマリストの流れの終結点としての、V. Propp^(脚注2) そしてA. J. Greimas^(脚注3) に一つの結実とともに行き止まりを見

出す。それは構造主義の名のもとにLevi-Straussが鋭く批判した部分でもある。本来のJakobsonの研究は、アリストテレス以来の詩学の研究の流れを正しく受け継ぎ、文学批評の本流に流れ込み、正統派として花開いていることは事実である。構造主義人類学と構造主義言語学とは、その意味で大いなるめぐり合いをしたが、また学問的には一時的に交叉したにすぎないとも言えよう。誤解のないように言えば、同じ学問ではないというだけで、人類学者は、自分の学問を、人間精神の働きを理解する一手段だと考えているということなのである。Levi-Straussにおける構造の概念は、その交換法則の理念、及び交換の概念につきるということは、一度指摘させておいていただきたい。これは大変重要なことで、言ってみれば、天空の中で、その中空に座す法則のようなものである。それ故、Levi-Straussは、一時的に吹き荒れた、構造主義や反構造主義の言葉の流行によって大きな混乱の危機に瀕した構造主義人類学を、その全ての誤解から守るために、その『構造主義』というきらめく戦旗を引き下げたのである。1983年。(脚註4)

さて、これから文学と人類学の接点に論をもって行く前に、念のため付け加えておきたい。社会事象を研究して見出された、社会が存続するための共通項に三点あり、それは、婚姻による交換、経済の交換、そして、情報の交換である。この三番目の言葉による交換の部分で、文学との接点が見出されるであろう。社会科学の方からは、神話を扱うことによって歩みよって行きたい。何故なら、神話とは、社会的に神話であることが認知されて、初めて神話であるのであって、それが神話の絶対条件であり、それ故、社会的事象であるからなのである。

2. 神話の構造

Levi-Straussは初期の神話に関する論文(註5)の中で、神話は一個の言語である。(認識としてはdiscoursに属す。)しかもきわめて高い水準ではたらく言語活動であって、ここでは、言ってみれば、意味がまずその上で滑走をはじめた言語的基礎から離陸することに成功する。しかし言語であるならば、神話が意味をもつとすれば、その意味は神話の構成に入って来る個々の要素にではなく、それらの要素が結びつけられている仕方に基づいているだろう。しかしながら神話的時間は依然として可逆的でもあり不可逆的でもあるという二重性をもつ。それ故、我々は神話の真の構成単位が個々ばらばらの関係でなく諸関係の束であること、構成諸単位が意味機能を獲得するのは、このような束の結合においてのみであることを仮定する。——後のvariationの萌芽が見られる。またこの束から出て来る諸関係は、通時的観点に立てば、遠い間隔を置いて現われるかも知れない。しかし、それらをうまくその「自然な」まとまりの中に復させることができれば、我々はそのことによって、直ちに新しい型の、出発点における仮説の要求を満たす、時間的準拠体系に従って神話を組織することに成功する。この体系は、すなわち、同時に通時的かつ共時的であり、二つの比較が我々の考えの理解を助けるだろうとの作業仮説を提示した。この問題意識に基づいて、Levi-Straussは20年後に我々に、見事な神話理論の結実を提示してくれたのである。

この段階で、参考までに方法論の参照として示されたオイディプス神話の例は、学問的視点を示す上で、大変示唆的なので、再度、引用させていただきたい。



右1 オイディプスの父系の固有名詞のもつ共通性

——大地から生まれた人間は出現した時、跛行性をもつ——土からの出生の継続

右2 人間の大地からの出生の否定——土からの出生をつかさどる怪物（スフィンクスも

しかり）を打ち負かす。

左3 血縁を過小評価

左4 血縁を過大評価

ここでの神話論のポイントはただ一つ。

同じものが同じものから生まれるか、違うものから生まれるかの間と、人間が一親から生まれるか、二親から生まれるかの間との間の矛盾の解消に於いて、論理的操作あるいは道具を提供しているということである。

この論は試論であって、後の神話論の展開はこの文化的背景の延長上を探るのではない。あくまで、ここでは二つの文明すら、或いは二つの思考的態度すら神話的思考はとり結ぶ努力をする姿勢を示すのではないかという将来的想像への期待であり、今は検証されない。ただ、神話作用の明確な一例であるとしていると言えよう。もう一つ、是非覚えておいていただきたいことは、たった一つ。オイディプス神話においても、人間が初めて生まれる時、欠陥をもって——足に障害をもって生まれるということだけである。

今一度、方法論上の大切なポイントとして、各神話をその全ての話形の総体として定義すること。神話は神話として知覚される限り、あくまで全てが神話なのであるということのを挙げておこう。

3. 天使との格闘

R. Barthes は「創世紀」3 2 章23～32節のテキスト分析——天使との格闘 (附註6) に於いて、大変示唆に富む分析を行っている。



ここで重要なポイントは、——彼は…ヤボクの渡しをわたった。……ヤコブはひとりあとに残った——この三節につきるだろう。Barthes の慧眼はこのシーケンスに宗教的読みを適宜入れながら、二つの昔話の具体例の混在形跡と評価し、その読みが最後まで続くと言う。それを文化的両義性とBarthes は判断するが、これは二つの昔話ではなく、違う文化的位置をもつ、或いは程度の問題として現われる二つの力の相克、或いは相重なって違うものを作り出す過程、或いは作り出せなかったのかもしれないその結果という方向へ考えられないだろうか。Barthes の志向は、いずれ、この了解不可能性の間にあるきしみ

を賞味する快楽の方向へ迂回して行くのだが。新約学の優秀な学者が、Jakobsonの分析方法を発展させ、Gospelの中に、Gospelの外のある一点へと非常な力で押し進めていくある推進力を、Gospelが持つことを証明したことはなかっただろうか。(圖17)

又、今一つの大きなポイントは、格闘と刻印と命名のstruggleである。ここでもヤコブの跛行という、チェックポイントを持つが、予想された権力関係の逆転と、跛行性という差異の刻印を同時にもつことは何か。印と意味の関係は何か。次に来る改命、あるいは命名は何か。Barthes は非常に優れた問題提起をここできなしながら、しかしTextの拡散の方向へ結論づけて行くのである。しかも、Barthes 自身が、ついに一つの構造に、一つのお伽話に還元してしまっているのである。Barthes は十分に、換喩的組立て——無意識の論理の方向から研究を続けねばならないことは指摘している。それにもかかわらず、それが方法論的には、開かれたテキスト、読書の香りの賞味へ直接結びつけられてしまうので、研究の方向を失うのである。

我々に残された道は、一つのテキストからのアプローチではなく、歴史的背景を同じくすることが証明され、同じ文明に属すると考えられる社会における、神話群において、その社会の中で働く意味の究明から出発することが急務である。

取り急ぎ、Levi-Straussの北南米大陸における、神話世界周航の旅へ、我々も一緒に船出してみようではないか。

4. MYTHOLOGIQUES



アメリカ大陸の神話の旅は、ブラジル奥地のインディオ、ボロロ族の鳥の卵獲りの神話から始まる。Levi-Straussから引用させてもらう。

最初の巻『Le Cru et le cuit』において、食物を火を使って調理することの発明ないし発見が、自然から文化への移行であることを物語る神話が出発点となる。神話は、自身の内包する論理に押されながら、次々と神話を辿り、いつか、自然と文化の境界線が、経済的交換の受容あるいは拒否、すなわち、自分の集団の境界を越えた社会生活の受容と拒否を分ける線上を通る神話に予想どおり到達する。このより進んだ社会生活は孤立した文化が食物を煮ることによって自然に刻印した最初の変化に比肩しうるものである。北アメリカのオレゴン州や、B. コロンビアのあたりまで来た時、この物品交換の異常に発達した、より進んだ社会生活がみられ、そこで神話は、始めに選んだ南アメリカの神話の話形とほとんど同じ形で出会い、南北大陸にわたった神話の環が閉じてしまい、また振り出しに戻ってしまうのである。

『神話論理』四巻は、地理的拡大と論理に関する問題に沿って進んでいく。『生のものと火にかけたもの』は、南米ブラジル中部から東部、『蜜から灰へ』は南米南北部、『テーブルマナーの起源』では南米最北部、そして『裸の人間』では完全に北アメリカへと。また、第一巻では感覚的事象の対立、第二巻では形態の論理の対立——空のものと満ちたものの e t c. ——、第三巻『テーブルマナーの起源』では、神話群は、辞項同士が対立するようになる根拠としてのマナー＝態度を対立させるようになる。即ち、いかにある状態からある状態への移行が行われるかという問である。第三巻では、カヌーに乗っての旅を物語る神話群が主で、出発点では遠かったものが、目的地では近くなっているという価値の

転倒、すなわち時間のカテゴリーが神話的思考の中に導入される。小説的次元が、徐々に神話的次元と交錯してくるのである。ここで、小さな声で文学とは何かの問いが入れられると思う。さて、それでもこの抽象的思考能力をもった民族は、他の文明と同じ思考と社会形態へ移行することはなく、神話周航の旅は、「唯一の神話」で終わるのである。即ち、この膨大な神話群は、結局、自然から文化への移行という大テーマを巡っての大変奏曲であったということである。天上世界と地上世界の交感の決定的な断絶という代償を払って獲得された移行であったこと。即ち、テーマは壮大な人類の問題であったということである。



5. 神話的思考と論理的思考

もし、この世の社会に、歴史とともに歩んでいる社会と開かれていないという状態で、
或いは閉じているように見えるという状態で、歴史と無関係の歩みを示している社会があ
るとしたら、後者は、時間が止まっているのではない。同じ時間の流れに抗して、恐ろし
い力で反対の方向へ矛盾を解消して行く力の存在があって初めて、時間が止まっているよ
うに見え、歴史を持たないように見えるのである。つまり、秘めた情熱をもって、強い力
で、最初のときと同じであらんと時間の流れに抵抗しているのである。神話は、この願望
と、戻ろうとする力と、その決定的不可能性を表すだろう。神話の行っているのは、原初
の欠陥の修復作業とも言えるだろう。人間が人間となるために初めて言葉を獲得し、自然
界から孤立して、自然と交感できなくなった時、人間が同時に得たあの欠陥の。

Levi-Straussの神話周航の旅が、「唯一の神話」で終わり、結局、元のところに戻って
来てしまったことは、神話というものが、実は、意味をもたない、あるいは、意味に結局
到達することができないということを示している。signifié なき signifiant あるいは、
signifié を見出せない、signifiant である。しかし、同時に、神話的思考の中に働く力学
は見出せたであろう。

では、この閉ざされたように見える世界と、我々の世界は、いかに繋がっているのであ
う。それは、閉じているように見える遺伝子体系の中ですら、遺伝子の一つが独自の動き
を示し、恣意的な選択をすることがあることの証明がなされたように、まず第一に歴史に
おける偶然性、大きな地理的条件、そして、他の諸々の条件によるだろう。ただ一つ言え

ることは、力関係のバランスによるに過ぎないだろうということである。

主に西洋文明においては、再び17世紀に、神話的思考は、科学的思考と、小説的表現の抬頭により、音楽や絵画などの芸術的表現の領域を除いて、現実的表現の中から決定的に消滅したということである。もし、アメリカ大陸であつたら、再びあの神話の最初に選んだ話形に会うところであろう。

Jacques Derrida (ジャック・デリダ) が、Levi-Straussをその贈与の一撃において批判し、その均質な象徴体系は、その論理の欠陥から、内側から崩壊するという時は、そしてその閉じた構造とその外側と言って批判する時、境界を侵犯して、そこからこの関係をつき崩そうと言う時、我々は、あの神話を思い出そう。神話は、もとより不一致を前提としていること。その一致をとり戻す、或いは不一致を修復しようとする作業であること。新しい文化や社会の変化に会う度に、神話は再びそれをとり込み、不一致を修復する考え方を働かす。ここでは、その境界においては、常に新しい文明の方が取り込まれる対象となる図式を思い出そう。

Levi-Straussが『神話論理』の第一巻を『Le Cre et le cuit 』とし、第四巻を『L'Homme ne 』にしている意味を思い出そう。le ne は文化から見れば再び、le creと同じものだからなのである。人間は出現した時から、自然に対して、欠陥をもつ存在であつた。

神話の解決の方法は、先のオイディプス神話の例に戻れば、——別の文明を基盤としてゐる神話であることは、もちろん承知の上で——「大地からの出生を認めないと言うならば、一つのものがなぜ二つのものから生まれるか証明してごらん、できないだろう。だから人間は大地から生まれたことを否定できない。」という問いと解決の論理だったのであ

る。

しかし、神話が結局は、意味を結びつけることができないことを知る時、また神話的思考は、はるか昔に崩壊してしまって、我々の中には、残滓としてしか残っていないこと、またそのような思考態度をとる社会を、文明と名のつく社会が、既に窮地に押しやっていることを考える時、そこにおいては、J. Derrida が、Levi-Straussをも含め、西洋文明とその哲学に対する過激な批判をする時、Levi-Straussの方では、さりげないけれども、強い意志を持って、西洋文明の主体の哲学に対して、反批判を行っているのである。

6. 神話と文学

神話的思考の研究、或いは、神話の研究の唯一実りある点は、神話そのものではなく、神話以外のものの意味を解き明かすことを可能にしてくれる点にしかないと言えよう。例えば、原初における人間の欠陥を、キリスト教はどうとらえ、どう説いてきたかとか、悲劇とは何かなど、そのような点においてである。

また、17世紀以降の西洋文明の依拠する考え方をとらえる一つの手掛りにもなるであろう。逆に言えば、時間を可速度的に取り込み、もう何にも戻ることのできない我々の文明を支えるものは、もはや自己の主体のみであるとするならば、そこから派生してくる様々な問題のとらえ方においてもである。

ロマン派の提起する問題や、その運動の目差す点も了解可能にならないであろうか。

或いは、神話の対極にあるとされていた詩の意味を説き明かすのに何か手掛りが与えら

れないかという問題もある。

神話の研究は、まだ始まったばかりで、この人類の知性に対して、我々は今だ、手探りの状態である。全てを含めて、これからであることは否めないが、しかしながら、我々の精神が、その思考を、十分持ち続けていることも、否めない事実なのである。

結

文学の運動と、文学の研究、或いは科学的態度——たとえ、科学という言葉すら、もはや曖昧であるとしても——における研究姿勢とは、相入れないものなのかも知れない。^(註10)しかし、もし文学が、文学運動のみであるとしたら、文学とは何かと素朴に疑問を発してみたいと思われる。

Barthes が S/Z ^(註9) で使った、去勢された男性のテーマは、神話的思考がよく使う、矛盾解消のトリックだったはずである。Balzacは明言していない。果たして、作家Balzacは、本当に死んだのであろうか。^(註10)

—追補—

Levi-Straussは、S/Z に対して、いたずらっぽい反論を書いている。^(註11) しかしそれを待つまでもなく、後期のBarthes やDerrida が、『共同理論』、1968年、において行ったことは、文学運動であったはずである。それも構造主義を、いくぶん作品を平板にしたという嫌疑において非難し、それならば、作品における作家の存在そのものまで、根底から揺るがして問おうという、幾分過激な運動であったはずである。

しかし、ここで作家を死に至らしめ、読者の地平を切り開く材料にBarthes が使っているテーマは、構造主義の理論の主張する、作家と読者、両方に同時に働く精神作用の領域から一步も抜け出していないではないかということなのである。構造主義は、少なくとも構造主義人類学は、複雑と見える社会事象も、よくよく分析してみれば、その深層に、

ある共通項が見出されるのではないかという仮説の上に理論を構築したが、その共通項から逆に全体を演繹しようなどという態度を見せたことは、一度もなかったはずである。逆に、そのような方向に走ったのは誰であったか。

また、いわゆるポスト構造主義と呼ばれる運動が、実は、光の源をとり入れた時にできる影をもって、影ができたといって光を非難する自己懐疑の関係を構造主義に対して持っていることも否めない。

しかし運動というものは、理論的基盤が弱くても、大きな波になり得るし、そこから遠く地平が開けることも事実である。歴史の示すとおり。しかしながら、そこに於いては、理論的環境は実は何一つ変わっていないことも事実なのである。

この問題は、ある意味で、二十世紀後半の思想を再び見直すことのできる今、一つの良い材料を与えていると言えよう。

1. BOAS Franz, アメリカインディアンの言語, 1911.
2. PROPP Vladimir, Morphology of the Folktale, Austin:University of Texas Press, 1968. (『民話の形態学』 大木伸一訳, 白馬書房).
3. GREIMAS Algirdas Julien, Semantique structurale, Paris:Larousse, 1966.
4. LEVI-STRAUSS Claud, Le Regard éloigné, Paris:Plon, 1983
(『はるかなる視線』 三保元訳, みすず書房, 1988)
5. LEVI-STRAUSS Claud, The structural study of Myth, in: Myth, A symposium, Journal of American Folklore, Vol. 78, n° 270, oct-dec, 1955, PP. 428-444.
- translated in Anthropologie Structurale, Paris:Librairie Plon, 1958.
(『構造人類学』 荒川幾男ほか訳, みすず書房, 1972)
6. BARTHES Roland, La lutte avec l'ange: Analyse textuelle de Genèse 32. 23-33, in: Analyse structurale e exégèse biblique: Neuchâtel Delachaux et Niestlé (coll. { Bibliothèque théologique }) 1971
(『構造主義と聖書解釈』 久米博ほか訳, ヨルダン社, 1977)
7. PETERSEN Norman R., Literary Criticism for New Testament Critics, Philadelphia: Fortress Press, 1978
(『新約学と文学批評』 第3章 宇都宮秀和訳, 教文館, 1986)
8. DERRIDA Jaques, 「他者の言語」『現代思想』1978年7月号、及び

La Structure , le signe et le jeu dans le discours des sciences humaines,

L'écriture et la différence, Seuil.

9. BARTHES Roland, S/Z, London: Jonathan Cape, 1975

(『S/Z』 沢崎浩平訳, みすず書房, 1973) -Original 1968-69 セミナー,

Paris, 1970.

10. BARTHES Roland, La mort de l'auteur, Manteia, V, fin 1968.

(『物語の構造分析』花輪光訳, みすず書房, 1979, 所収)

11. LEVI-STRAUSS Claud, Claud Levi-Strauss, paru dans la collection

Idées-Gallinard, Paris, 1979.

SELDEN Raman, A Readers Guide to Contemporary Literary Theory, Hemel Hempstead,

Harvester Wheatsheaf, 1985

(『ガイドブック 現代文学理論』 栗原裕 訳, 大修館書店, 1989)

EAGLETON Terry, Literary Theory, an Introduction, Oxford, Basil Blackwell, 1984

(『文学とは何か—現代批評理論への招待』 大橋洋一訳, 岩波書店, 1985)

TODOROV Tzvetan, Critique de la Critique Un roman d'apprentissage,

Paris, Seoul, 1984 (『批評の批評』 及川穂, 他訳, 法政大学出版局, 1991.)

LODGE David, After Bachtin: Essays on fiction and criticism,

Routledge, Curtis Brown Group, 1990.

(『バフチン以後』 伊藤誓訳, 法政大学出版局, 1992.)

JAKOBSON Roman, Essais de Linguistique Générale, Paris, Les Editions de Minuit,

1963 (『一般言語学』 川本茂雄 監修, 共訳, みすず書房, 1973.)

WACKNIGHT Edgar v., What Is Form Criticism?, Philadelphia, Fortress press, 1969,

(『様式史とは何か』 加山久雄訳, ヨルダン社, 1982.)

PERRIN Norman, What is Reduction Criticism?, Philadelphia, Fortress Press, 1969.

(『編集史とは何か』 松永希久夫訳, ヨルダン社, 1984)

BEARDSLEE William A., Literary Criticism of the New Testament, Philadelphia,

Fortress press, 1970, (『新約聖書と文学批評』, 土屋博訳, ヨルダン社, 1983)

PETERSEN Norman R., Literary Criticism for New Testament, Philadelphia, Fortress

Press, 1978. (『新約学と文学批評』 宇都宮秀和訳, 教文館, 1986)

PATTE Daniel, What is Structural Exegesis?, Philadelphia, Fortress Press, 1976.

(『構造主義の聖書釈義とは何か』 山内一郎他訳, ヨルダン社, 1984)

ROBERTSON Davil, The Old Testament and the Literary Critic, Philadelphia, fortress

press, 1977. (『文学としての聖書』 荒井章三訳, 教文館, 1986)

BARTHES R., STAROBINSKI J., & OTHERS, Analyse structurale et exégèse biblique,

Neuchâtel, Delachaux e Nieslé, 1971

(『構造主義と聖書釈義』所収, 久米博他訳, ヨルダン社, 1977)

BARTHES Roland, Introduction A L'analyse Structurale Des Recits, Paris, Seuil,

1961-71, (『物語の構造分析』 花輪光訳, みすず書房, 1979),

S/Z, London, Jonathan Cape, 1975

(『S/Z-バルザック『サラジヌ』の構造分析』 沢崎浩平訳, みすず書房, 1973.)

FOUCAULT Michel, L'ordre du discours, Paris, Gallimard, 1971,

(『言語表現の秩序』, 中村雄二郎訳, 河出書房新社, 1981)

浅田 彰 『構造と力』一記号論を超えて、勁草書房, 1983,

LEVI-STRAUSS Claud, Anthropologie Structurale, Paris, Librairie Plon, 1958

(『構造人類学』 荒川幾男ほか訳, みすず書房, 1972.)

Leçon inaugurale faite le Mardi 5 Janvier 1960,

(コレージュ・ド・フランス 社会人類学講座開講講演「人類学の課題」, 『今日

のトーテミズム』 仲沢紀雄訳、みすず書房、1970、所収)

Le Pensée Sauvage, Paris, Librairie Plon, 1962. Trans. English, London, George
Weidenfeld and Nicolson, 1966.

Mythologique ★ Le Cru et le Cuit, Paris, Librairie Plon, 1964.

trans. English, Harper&Row, NewYork. 1969.

★★ Du Miel aux Cendres, paris Librairie Plon, 1967.

Trans. Eng. Harper&Row, NewYork. 1978.

★★★ L'origine des Manières de table, Paris. Librairie Plon, 1968.

Trans. Eng. Harper&Row, NewYork. 1978.

★★★★ L'homme Nu, Paris, Librairie Plon, 1971.

Trans. Eng. Harper&Row, NewYork, 1981.

De Prés et de Loin: avec ERIBON didier, Paris, Editions Odile Jacob, 1988

(『遠近の回想』 竹内信夫訳、みすず書房、1991。)